

作兵衛 升歌^{しやうか}

汽笛一声新橋をく『鉄道唱歌』の節にて

- 一 酒は一升栓を抜き はや作兵衛は飲み干せり
水屋の陰に入り残る 妻の渋顔^{しぶがほ}友として
- 二 ここは飯塚鶴三緒の 作兵衛タツノの墓どころ
ヤマは消えても消え残る 名は千載の後までも
- 三 ヤマを描き^{えが}つゆきし世の 唄や話で笑わせて
九十二までを生き抜いた 作兵衛と酒の物語
- 四 父は川舟船頭で 炭を運ぶが稼業なる
されども鐵路が伸びゆけば 舟はヤマへと乗り上げる
- 五 母に連れられ作兵衛も 弟背負いてオロシ底
七つ八つからカンテラを 提げるその手のいじらしさ
- 六 鶴嘴鍛冶や工場で 疲れた身体に鞭打って
辞典を写して字を学び 酒にも目覚めし^{はたち}二十歳過ぎ
- 七 絵描きになる夢持ちつつも 父が病に倒るれば
ペンキ屋修行を諦めて 兄と二人で炭を掘り
- 八 炭坑仕事のきびしさは 酒でも飲まずにおらりようか
あがりの一杯角打ちは 炭掘る坑夫のいのち水
- 九 口より小さなお猪口にて 酒を飲んでではなるまいぞ
喉に詰まれば一大事 いいつけ守ると茶碗酒
- 十 仲を取り持つ納屋頭 この作兵衛という男
一滴の酒も飲まない 仲人口も極まれり
- 一一 それと信じる新妻^{しんさい}を 裏切るわけにはいくまいと
みんごと一年酒を断ち 仲人口にも義理を立て

一二 しかして一年過ぎたなら 菰樽底が抜けるごと
家財も着物も酒に化け 妻の堪忍緒が切れる

一三 作兵衛家を追い出され 兄が荷物を引き取りに
大八車を曳きくれば タツノはきりりとにらみ据え

一四 ツケの溜まりし通い帳 一冊荷台に放り投げ
それだけあれば荷車に 充分じゃろつと追い返す

一五 通いを一冊積み帰る 兄にも済まぬと詫びを入れ
元の鞆へと納まれる 作兵衛タツノの縁えじかな

一六 もろびと加わる禁酒会 ひとり拒めば角も立つ
やむなく入って酒断ちて 禁酒の歌など唄いおり

一七 ギリシアローマの英雄も 酒色に溺れて身を崩し
ついには国まで失えり われらは禁酒で国興し

一八 いのちの水を飲まずして などで国など興ろうか
やがてもたげるウツバミの 鎌首酒を恋しがり

一九 そこは女房のやさしさよ せめて一杯飲ませんと
遠くの酒屋へ買いにゆく 人目を忍んで右左

二十 暑いさなかにねんねこに 赤児を背負うと見せかけて
酒の瓶をば抱きくれば 人肌ほんのり温かく

二一 ついつい飲み過ぎドブに落ち ようよう帰れば妻嘆く
それでも仕事は懸命に 夫婦めおとふたりで子を育て

二三 飲む打つ喧嘩の花盛り ヤマの気風のただ中で
バクチや争い目もくれず ひたすら働く子らのため

二三 遊び知らずと呼ばば呼べ 変わり者だと言わば言え
されどさかずき手にすれば 筑豊無双の酒の神

二四 鶴嘴金槌握れども まことの願いはさにあらず
その手はいつも空中に 絵を描きおりと振り返る

二五 戦に取られし長男も いつかは無事に帰りきて
父と子二人の差し向かい 杯交わす日夢に見て

二六 息子は還らず国破れ やがては追われるヤマからも
酒よ心があるならば わかつておくれよこのつらさ

二七 悲しみこらえて取る筆の 先より生まれるヤマの絵は
孫子のための置き土産 酒がほんのり色を付け

二八 江戸の絵描きも描きやきらぬ 地ぞこの闇のその奥に
ひとすじ光を当てたなら 先山後山よみがえる

二九 忘れられゆく炭坑の 仕事と暮らしのありのまま
知らずば語りて聞かせよか 坑内唄と酒と絵で

三十 フレを無学と罵りて 家も貧乏とさげすんだ
世間の風は冷たくも ヤマの心は温かく

三一 軒より落つる雨だれの いつしか石をうがつごと
描きためられしヤマの絵の 日の目を見るも道理なる

三二 炭坑絵巻が世に出でて たちまち起こる驚きの
声にも驕らずひたむきに 酒と絵筆に日を重ね

三三 常は笑顔の作兵衛も ひとたび筆を持つならば
呼べども気付かずただひとり 記憶の切羽へ進みゆく

三四 ひとつの嘘も許すまじ 仕上げた絵にまた筆入れる

なにゆえ人は絵を描くや その真髓がここにあり

三五 喜びくればそれでよし 金なぞいらぬ一錢も
描いたその絵は人に遣り ひとり楽しむ茶碗酒

三六 もろびと尋ねてくるならば 面白話が走り出し
妻がこっそり足を蹴る うちの炬燵にや馬がいる

三七 夫は妻をヤマネコと 妻は夫を狒々ほほと言い
からかい怒ってまた笑い 翁と媪の時はゆく

三八 あんたは酒が飲めぬのか しからばサイダー飲みなされ
客を尻目に酒飲めば 妻は呆れて声もなし

三九 この頃酒には前もつて 酔い覚め水が入れてある
薄い酒ならわしゃいらぬ 火のつく酒を飲みたいと

四十 描いては飲んでまた描いて 廊下の板を外すなら
並び立てる酒の瓶 飲んでおくれと待ちており

四一 ひとたび酒瓶開けたれば そのままおくなら水になる
四合五合に一升瓶 栓するその手の素早さよ

四二 酒精が抜けてはただの水 爛などつけるは論外と
冬のさなかも冷や酒を 飲み干し心を火と燃やす

四三 ゴットン節は限りなく 禁酒会の歌も高らかに
この歌唄うたうて飲む酒が いちばん旨いと笑わせて

四四 妻は笑わずおるけれど フレは笑わずおられぬと
夫婦めおとの掛け合いその様は なくてはならぬ酒の友

四五 鰯に鯨に香の物 手を変え品変え作りたる
妻の料理と酒こそが 不老長寿の秘訣なる

四六 いささか酔つたら井戸端で 釣瓶で汲み上ぐ風呂の水
五右衛門風呂の熱き湯に 入ればすつきり上がり酒

四七 もしも作兵衛飲まぬなら 規則違反になりますと
笑い飛ばして登りゆく 米寿の坂もなんのその

四八 炭にまみれて育てたる 息子や娘やその子らに
困まれ酒杯を挙げるなら 苦勞の曰々も花となる

四九 飲みも飲んだり酒の栓 並べて埋めれば石畳
ここは長崎オランダか いや作兵衛の夢の道

五十 九十二までも描きたれど ついには筆持つ力失せ
されども這い行くその先にゃ 一升瓶が立ちており

五一 酒を愛した人なれば 酒も彼をば愛したり
飲んで飲まれて愛し合う 水も漏らさぬ仲なれば

五二 比翼連理の妻を得て 切るに切られぬ酒を飲み
劍菱寒梅白牡丹 競いて絵筆の糧となる

五三 一生かけて描き続け 一生かけて飲み抜いて
民の宝を残したる これぞ作兵衛「一生瓶」